

■■■ まちの特性を活かしたまちづくり～力強さと質の高さ、そしてアジアという視点 ■■■
新長田を中心に「まちの特性を活かしたまちづくり」に長年取り組んでいらっしゃる正岡健二さんにインタビューをさせていただきました。KFCの近所（ジョイプラザ西隣）に鉄人28号が完成し、人々の注目を集めているのを機にしたインタビューです。

ーまず簡単に自己紹介をお願いします。

長田出身の61歳で、現在は須磨在住です。私の祖父が奄美の出身です。当時神戸製鋼では溶鉱炉で働いてくれる人を募集していて、「暑いところの人に働いてもらったらいいだろう」という企業の考えで、奄美からの方が神戸製鋼で働き始めたのです。奄美出身でも溶鉱炉はもちろん暑いんですけどね（笑）。

私の本業は有限会社マルヨネという肉屋です。それ以外にほたる火コンサート協会代表、株式会社神戸ながたティ・エム・オー取締役運営委員長、NPO法人KOBE鉄人PROJECT理事長などもしています。

ーまちづくりに関わったきっかけは何でしょうか。

30代半ば（1980年頃）に、ドーナツ化現象真っ只中でこの地域の人口がどんどん減少していく中、町を活性化させるために町の特性を活かしたまちづくりを考え始めました。そして仲間と「西神戸街研究会」を立ち上げ、「てべんとう」というミニコミ誌を発行することになりました。

長田は記録に残っているもので1800年も前からの歴史があり、長田神社や高取山など山と海に囲まれた歴史の古い町です。ミニコミ誌には道路の名前の由来など様々な歴史を探って掲載しました。

数十年前、長田には映画館や劇場、家族で入れる温泉などいろいろな娯楽施設がありましたし、お正月にクジラのお雑煮を食べたり、「タイの浜やき」などの名品もあったそうです。駒ヶ林にはもう無くなってしまったお祭りが私が調べただけで50以上もありました。当時、金平町や吉田町はとても元気な町で、そこから須磨水族館（現：須磨海浜水族園）まで地下鉄を作ろう、そして三宮まで伸ばそうという話など町を元気にするためにいろいろ話合いをしていました。

ー地域の特性を活かしたまちづくりということで、数年前から韓国、ベトナムなど日本を含む「アジア」という視点からもまちづくりを考えておられるようですが。

長田はご存知のように韓国、ベトナムの方の多い町です。そういった町の特性を活かして、「アジアン デ ナイト」というイベントを数年前から開催しています。当日はアジア各国の屋台や民族衣装パレード、民族音楽&舞踊、ストリートパフォーマンスなどが繰り広げられます。大事なのは自分の価値観だけで何事も見ないこと。それは日本人も外国人も同じです。食べ物ひとつとっても「あんなん食べるんや」ではなくて、お互いの理解する力が必要だと思っています。

以前、大阪市立大学の院生の調査を手伝う中で、奄美会館を紹介したのですが、昔、韓国人が学校に入学するには保証人が必要で、その奄美会館にいた方の子どもと韓国人の子が友だちだったので、保証人になったという話を聞きました。その話を聞いて、昔から日本人と外国人とでコミュニティができていたんだなと思いました。

—お店では中国人、ベトナム人、韓国人、ペルー人を雇用しているそうですが。

今はペルー人はいません。様々な部位のお肉を扱っているのので、外国人のお客さんもたくさんいらっしゃいます。従業員に外国人がいることで、母国語で安心して買い物ができることは良かったことです。そんなふうにお互いにとって居心地のいい町になればいいなと思います。また本場の餃子を従業員の中国人に作ってもらって、日本人に合うように改良して販売したりもしています。

個人差があるので国民性かどうかまでわかりませんが、中国の方に仕事を任せると自分の仕事はきっちりしますが、手が空いていても他の人を手伝うことをしません。理由を聞くと「他の人の仕事がなくなってしまうとその人が困るから」ということでした。また時間になったら、さっと帰るのも日本人と違うなと感じるのです。しかし、特に外国人だからといって、雇いはじめに日本人と違うことはしていません。「習うより慣れろ」ですね。

外国人の方たちにはまずは機会を均等に与えることが必要ですが、一方で外国人の方たちも権利と義務ということで、ちゃんと納税すべきだと思っています。

—これからの長田を中心とした神戸のまちの展望は？

できるだけ広域から町に人を呼び込むための戦略戦術として、ダイナミックさと質の高さが必要だと考えています。

10月には鉄人28号が完成しました。これは漫画家の横山光輝さんが須磨区大池町のあたりのご出身で、当時繁華街だった新長田が遊び場だったこともあって、町の活性化に一役かってもらおうと、高さ15mの像を作ることになりました。鉄人が南の方向を向いているのは、電車からみると正面を見ることができないので駅を降りて正面を見に来ていただけるようにということと、駒ヶ林神社の神主の方によると北は鬼門なので、新長田の悪い気を全て吸収してもらおうという思いがこもっています。今度は鉄人28号の彼女の忘れ物が長田のまちに登場するかもしれません(謎)。ご期待ください。

しかし、鉄人を作っただけでは人の呼び込みは続かないと思っているので、「大人が3時間楽しめる町」の提案をしています。新長田の南にある二葉小学校跡地もロボット構想などいろいろな計画がありますし、神戸映画資料館もあるし、町に三国志関連のものをおいて回遊していただけるようなスタンプラリーなどのイベントも行っています。これからは地場産業を作っていく必要があると考えており、神戸芸工大と協力してアニメーションセンターを作ることになっています。

以上のようにいろいろな企画やイベントがありますので、ぜひ一度新長田に遊びに来てもらえたらうれしいですね。

様々なまちづくりの提案をお持ちの正岡さん。あっという間の1時間半のインタビューでした。

(インタビュアー 操田誠、志岐良子)

◆9月の研修会報告～旧「神戸移住センター」を訪ねて

JR元町駅から鯉川筋をひたすら北へと歩くと、山の麓に堂々とした5階建ての建物が見下ろすように建っています。ここがブラジルへの移民の窓口だった旧「神戸移住センター」です。保存運動を受け整備され、現在は「海外移住と文化の交流センター」という名称になっています。

まず、関西ブラジル人コミュニティ（松原マリナ代表）の活動である子どもたちのためのポルト

ガル語の母語教室と日本語学習の様子を参観しました。休憩をはさみ4コマの学習時間を設定し、毎週土曜日の午後開かれている教室です。

教室は1つ。その1つの場所を15~16名の子どもたちがレベル別に3グループに分かれて勉強していました。ポルトガル語が飛び交う横で、漢字の学習に一生懸命取り組むグループがあるなど実にダイナミックな空間でした。

近郊に住む子どもだけでなく、遠くは奈良、姫路からも保護者の送り迎えのもと通っているそうです。向かいの部屋では日本語を学んでいるお母さんの姿がありました。「子どもたちが親の勉強する姿を見ることはとても大切なことだと思います」と松原マリナさんの言葉が心に残りました。

KFCで子どもの学習支援に関わられている参加者の一人は、「何を学ばせるのかがはっきりしている。目的・手段・練習方法が個人別にきちんと把握されている。それは、支援者が替わっても一貫性のある指導につながる」という感想を述べておられました。

次に館内の見学をしました。ブラジルの日系人は今や150万人を超え、6世も誕生しているそうです。昨年は両国で移民100周年を祝う記念事業がありました。ここには、1908年に第1回の移民船「笠戸丸」がブラジルに向け出航して以来の様々な貴重な資料が展示されています。南米への長い船旅を想定して、館内が船内風につくられていることには驚きました。むきだしの配線類や廊下の両側に並ぶいくつもの部屋は、リニューアルされているとはいえ、当時の様子を十分に感じさせるものでした。

窓に目を向けると、かなたに神戸港が広がります。全国から集まった人々が、ここでどんなことを語り合ったのだろう、またどんな思いで港への坂をくだったのだろう・・・などいろんな思いにかられました。(宇野 祐子)

■■■KFC日本語プロジェクト■■■

◆日本語ボランティア養成講座を受け終えてー 10月のKFC研修会からー

5月から始まっていた「日本語ボランティア養成講座(初心者コース)」の最終回が10月17日にあり、それに便乗する形で10月のKFC研修会が持たれました。場所は、アスタくにつか4番館、講師は斎藤明子先生です。

まず、奥コーディネーターの指示により参加者がくじ引きで数名ずつの3つのグループに分けられました。この日の前半は講話を聴くのではなくグループ討議で、後半は、日本語の教え方などに関する質問に斎藤先生が答えてくださるのです。

グループ討議の議題は次の3項目です。A.ボランティアで日本語支援をしてみてもの感想や意見。B.今後どんなボランティアになりたいか。C.ボランティア活動をしなかった場合、その理由。参加者各自がそれぞれの感想・意見をポストイットに書き出し、グループごとに話し合いながら意見の内容別に分類、模造紙に貼り付けました。そしてグループ発表が行われました。ちなみにC.の意見は皆無でした。

3つのグループはそれぞれ独立して討議されました。しかしながら、感想・意見が他のグループと似通った事柄があります。たとえば、

- A1.日本語に関する予備知識・基礎知識のない学習者がいることに驚いた。
- A2.日本語を教えるのはけっこう楽しい時間だ。学習者の積極性・熱意に元気づけられる。
- A3.日本語能力検定試験を受けようとする学習者の支援は難しい。
- A4.自分の日本語の知識不足を痛感、日本語辞書の携行の必要性を感じた。
- A5.助詞や助動詞などの文法事項の説明が難しい。
- A6.教えるのが初めての自分の教える技術力を考えると、不安がいっぱい。

B1.学習者の疑問に適切に答えることができる語学の素養を身につけたい。

B2.学習者と仲良くなりたい。学習者との和を保ちたい。

B3.学習者の勤務先でのコミュニケーションの円滑化のための支援をしたい。教室外においても学習者と一緒に活動したい。

以上が2つ以上のグループに共通する意見でした。一方、グループ固有の意見も多かったが、紙面の都合上、一部のみ抜粋掲載します。

A11.実力が上達しないのに、教材消化ページ数にのみ興味を示す学習者に押されがち。

A12.思っていたより、責任を感じる。

A13.やりがいを感じる。

A14.学習者がうまくなっていく過程を見るのが楽しい。

A15.いろいろな人との出会いがあるのがうれしい。

A16.二十人もの学習者を自分一人で教えるのは難しい。

A17.日本語ボランティア養成講座で学んだことが役に立っている。

A18.「絵カード」の利用はたいへん有効であることを体験した。

A19.教える前の準備の重要性を感じるが、そのために長時間を要する。

A20.学習者の言葉がわからない。

A21.促音の発音指導の仕方がわからない。

B11.今後も続けていきたい。

B12.学習者に寄り添っていきたい。

B13.支援者の都合でボランティアできなくなったのは残念。土・日ならしてみたい。

休憩後、グループ発表に対する斎藤先生のコメントと質疑に対するお答えをいただきました。

その中から、ボランティアが日本語支援するうえで特に重要なことを記録に残しておきます。

日本語能力試験(A3項)は、来年以降、読み・書き・聞き取りなど科目ごとに合格最低点が設けられる。苦手科目の克服が課題となる。

助詞・助動詞など個々の文法要素の説明(A5項)ではなく、その文型を利用して何が表現できるのかに力を入れるべき。

一人で二十人もの学習者を指導する(A16項)というのは、ボランティアではそもそも無理な相談である。

促音の発音指導(A21項)は感覚によって指導することが大切。促音とは「口内で発声する準備をして待機している状態からの解放」である。また、促音のできない学習者に対しては、促音を使わない表現方法を導入してやり、学習者が自信を持って楽しく学習できるようにしてやるのも一法である。

斎藤先生は最後に、ボランティア活動は何より楽しくあるべきである、と講座を締めくくられました。

(ニュース係 操田誠)

◆秋祭りに参加して

天気予報は雨にもかかわらず、11月1日は秋晴れの気持ちのよい朝になりました。私は初めての参加だったので、どんな風なお祭りなんだろうとワクワクした気持ちで出かけました。当日は初めての顔合わせにもかかわらず、それぞれの国の料理が協力し合いながら作られました。お互い言葉は違っても日本語に、英語に、タイ語、中国語、ベトナム語が飛び交い、ジェスチャーも混ざって、2時間ほどでたくさんの色とりどりの料理が完成しました。日本にいながら、アルゼンチンのエンパナーダ、韓国のキンパブ、タイのトムヤムクンなどなど、どれもおいしくて、お

腹も一杯。笑いも一杯。おしゃべりの花もいっぱい咲いて、時間の経つのも忘れて楽しいひとときを過ごしました。国は違っても、ゲームで一緒に笑い、料理でともに感動し、おしゃべりを楽しめました。今日のおまつりこそ、すばらしい異文化交流だと感じました。（枝木真紀子）

■■■ K F C 外国にルーツを持つ子どもの学習支援 ■■■

◆外国にルーツを持つ中・高校生対象の英語クラス開講！

スタン・カーク先生に10月10日の午後、先生の英語の授業の始まる前にインタビューをしました。先生は甲南大学の国際言語文化センターで学生に教えるのが定職です。大学の先生によくみられる謹厳なタイプを想像して緊張しておりましたが、お会いした先生は色白でニッコリ微笑まれ、お兄さんのような感じを受けました。

先生は1990年、カナダから来日。妹さんがかつてのベトナムのボートピープル（当時4歳でした）と結婚された関係でベトナム人の知り合いが多く、その苦しい生活を見聞きしてこられ、その窮状を少しでも救えないものだろうかと考えておられました。そんな時、ベトナム人を中心とした外国人のサポートをしているKFCを知り、金理事長に会われ、色々話をされた末、子ども支援の一部として中・高校生に英語指導をすることを決められました。

又、日本の教育で金持ちとそうでない人の間に差があることを気にされています。金持ちの子どもは塾などへ行くことができ、先生に助けてもらい学力がつかますが、お金のない人にはそんなチャンスがありません。そういうことで学力の差がでることはアメリカで増えています。日本でも同じ様な傾向が出ているようだとされます。先生はベトナム人の子どもだけでなく、色々な発展途上国の恵まれない子どもたちの力になりたいと強く希望しておられます。

今は土曜日の4時から6時までネーティブの人による、聞く力・話す力をつける役目を受け持たれています。訳や文法は同じように現職にありながら奉仕して下さる日本人の先生が助けられています。

先生の夢は、今、大学の教え子に一彼らはアルバイトでせつせと家庭教師をしていますが一ここでの活動に参加させ、奉仕の経験をさせ、支援者の人数を増やすことによって授業を充実させたいことだそうです。この夢はKFCにとっても本当にすばらしいと思います。（ニュース係 気賀倭文子）

◆保護者会を開催して

10月25日（日）10:00から保護者会を開催し、小学生を中心とした16名の子どもの保護者14名が出席してくださいました。

事前に支援者の方からKFCでの子どもの学習や態度について、保護者にお聞きしたいことなどを書いていただいております。それをもとに話を進めました。

普段、保護者への連絡では言葉の面での問題や保護者の働く時間の都合などから、なかなかうまく連携をとることができません。ですので、今回の保護者面談では半分ぐらいが初めてお会いする保護者でした。何か保護者に連絡、相談などしなければならぬ時は本当に大変で、中国語やベトナム語のできるスタッフがいる時はまだいいのですが、いない時には理解してもらっているのか、伝えたい事が伝わっているのか、お互い不安になります。

面談では、保護者からお聞きした事の中で初めて知った家庭の状況やお家での子どもの様子、保護者が日頃、子どもに関しての不安や困っていることなどを知ることができました。今回よく耳にしたことは、「保護者が日本語の読み書きも話もできないため、学校の勉強を確認することができない」、「学校から意見を頂いた後にどのようにサポートしてあげたらいいのかわからない」、「宿題を聞かれてもわからない」、「子どもはベトナム語が話せないからお互いに壁があ

るため勉強を教えられない」といった点でした。保護者は思いはあってもできないのだというのを聞いている私たちも辛く感じました。その他にも「子どもがベトナム語を忘れて、十分話を聞いたり、話をしてあげることができないので、KFCでも気にかけてほしい」、「友だちができず、ずっと自宅に閉じこもっていて心配。帰国願望が強かったこともあり最初はKFCに行くことを嫌がっていたが、今は楽しみにしている」、「家では家庭科で習った日本料理を作って、兄と一緒に食べている」、「家では宿題を終えないと寝かせないようにしている」、「子どもは簡単な算数の計算ができないので、お金を使って教えたりしている」、「将来は大学に行きたいらしいので、行かせてやりたい」、「家ではゲームは30分と決めている」、「マンガや雑誌ばかり読んでいる」と様々な家庭での子どもの様子をお伺いすることができました。

KFCでの支援は一日の内の本当にわずかの時間であり、限られた時間で彼らを全面的に支える事はできません。しかし、KFCに来た時の表情や自ら話を訴えてきた時には耳を傾けるように努めています。そこからみんなで情報を共有して話し合い、改善点を探していきます。保護者や子どもの抱えている悩みや負担を少しでも手助けすることも私たちの役目でもあると思います。

今回は非常に多く情報交換をすることができ、それを活かして今後も家庭との連携を大切にするとともにいいものを築いていけるようにしたいと思います。

お互いに話したいことが多く、また通訳を入れての話だったため、最大1時間ぐらい待っていたり、十分お話しする時間を取れなかったりと、ご迷惑をおかけしました。次回はもう少し時間を延ばして実施したいと思います。お忙しい中、当日ご参加いただいた支援者のみなさま、ありがとうございました。（トラン ティ ティエン アン）

■■■ ハナの会 ■■■

◆ハナの会、秋の遠足 !!

去る10月21日（水）、23日（金）の二日に分けて、毎年恒例の秋の遠足に行ってきました！以下は、ボランティアの方の感想です。

10月の良く晴れた日、デイサービスセンターハナの会は「しあわせの村」へ秋の遠足に行ってきました。去年の遠足では一日は雨に降られ、寒い思いをしたようですが、今年は秋晴れ！日なたにいた人は日焼けをしてしまうほどの良い天気でした。

お昼にいただいたお弁当はとてもおいしく、同じく遠足で来ていた保育所の子どもたちがのぞきこみ、保育士さんは「大きいお弁当！」と驚いていました。

お腹がいっぱいになると楽しい宴の時間です。ハルモニ（おばあちゃん）・ハラボジ（おじいちゃん）たちが歌い、踊り出すと、紙飛行機を飛ばしに来ていた60代の男性が、とてもまぶしそうな表情でその様子を見つめていました。きっと羨ましくなるくらい楽しそうにしていたからだと思います。

桜の花が咲くころになったらお花見、少し涼しくなったら秋の遠足と、おいしいものを食べ、同じ世代の友達と歌ったり、踊ったりしながら楽しく過ごせる時間を提供し続けられるよう、自分にできる事をしていこうと思います。

（ハナの会ボランティア 丁由紀子）

■■■ ハナ介護サービス一居宅介護の西田さん、訪問介護の松嶋さんへのインタビューー ■■■

KFCは従来からハナの会という名のもとに、主に在日コリアンを対象としたデイサービスを行ってきましたが、2009年春の介護保険の改正を機に、居宅介護支援事業所と訪問介護事業所を開設し、活動の場を広げました。発足して半年たったところです。アスタピア新長田エスタガーデンの5階を、KFCのもう一つの事業である日本語学習支援と共有してうまく使っています。

そこで、職員として働いておられる居宅介護支援事業所の西田義信さん、訪問介護事業所の松嶋美見さんを訪ねてお仕事のことを伺いました。お二人は8時半から5時半まで、事務所に常勤されています。

居宅介護支援の西田さんはかつて某製造会社で20余年勤務され、最後はその会社の病院の事務長職につかれ、病院業務を通して病人に接してこられました。医療の実態もよくご存知です。定年後、これまでの経験を生かすことを考え、この仕事につかれました。利用者の要望、不都合を聞き、改められることを関係者に交渉するのが今の仕事です。また利用者にどのようなことをしたら喜ばれるか考えてケアプランも作ります。

訪問介護の松嶋さんはお姑さんの世話を一人でされ、介護制度のなかった頃の苦労を味わわれました。そのあと、ご主人をまた一人で看取ることとなりました。その経験を生かしたい思いと、病院の仕事に関係しておられる娘さんのアドバイスもあって、ホームヘルパー1級の資格を取られました。今のお仕事は大まかにいえば、西田さんが作られたケアプランを実現させることです。でも実際はここに所属している10余名のヘルパーのコーディネートが主な仕事です。利用者と直接接するのは訪問する女性ヘルパーに任せています。「現場監督のようなものです」と言われました。人手の足りない時は自ら家庭ヘルパーとして行くこともあるそうです。ヘルパーの悩み、不満、希望を聞き、利用者の要望を受け止めて対策を考えます。例えばヘルパーは一か所での仕事は2時間という枠があるのが一般的ですが、病院へ付き添いとなるとすぐ時間オーバーしてしまい、サービスでこなすにも限度があることなどです。

今、二人が気を使われているのは利用者との信頼関係と言われました。と言いますのは、KFCへ来られる利用者は在日コリアンが多く、彼(女)らには私たちが想像できないような日本で虐げられた過去があります。今、介護を受けられている80代から90代の人たちには差別の中で戦いながら、耐えながら生きてきた日々は、その苦労は日本人には「分かるものか」という気持ちが強いのです。一方、今、ヘルパーの仕事をしている人はほとんどがその時代に生まれてなかったのですから、その問題を理解するのは難しいことです。それに言葉の壁もありますし、長年日本に住まれている人たちとはいえ、お互いにカルチュアショックは大いにあると言われます。

お二人は派遣するヘルパーへはもちろん、仕事を頼む関係部署の人たちにも在日コリアンの立場を理解してもらえるように持っていくのも役目と受け止めておられます。

介護精神のほかに、KFCならではの問題を自覚し、しっかり受け止め、考えておられる西田さん、松嶋さんが支えている事業は順調に育っていくのではないかと、色々話を伺った私は感じました。 (ニュース係 気賀倭文字)

■■■ 今後の予定 ■■■

■ 研修会

12月13日(日) 13:30~16:00

「日本のお正月」

於 デイサービスセンターハナの会

■ 日本語能力検定試験2級合格目標クラス

9月5日(土) ~ 11月28日(土)

14:30～17:00

於 多文化子ども共育センター(moi)他

■ハナの会一泊旅行

11月27日(金)～11月28日(土) 於 淡路

■クリスマス会

12月22日(火) 16:30～17:30

於 多文化子ども共育センター(moi)

■年末年始のお休み

12月30日(水)～1月3日(日)